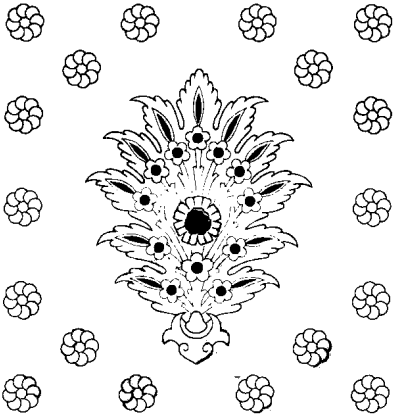
日本文学全集 59

外村 繁
川崎長太郎



集英社

日本文学全集
全88巻

53 外村繁 川崎長太郎集

昭和五十年四月八日 初版
昭和五十六年十月二十日 四版

著者 外村繁 川崎長太郎

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ10
電話 出版部 東京(238)二六三一
販売部 東京(238)二七八一

印刷 大日本印刷株式会社

著者との了解により検印廃止いたします。
落丁本、乱丁本はお取りかえいたします。

© 1975 Printed in Japan 0395—123053—3041

¥1,250

編集委員

伊藤　整
井上　靖
中野好夫
丹羽文雄
平野　謙

装幀　後藤市三

挿絵　牧野邦夫

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

目次

外村　繁集

鵜の物語　七
夢幻泡影　四〇
春の夜の夢　五六
最上川　七四
岩のある庭の風景　九七
澪標　一二三
落日の光景　二〇三

川崎長太郎集

朽花　二三三
裸木　二六九
路草　二九四
鳳仙花　三七一
山桜　三八二
注解　三九五
作家と作品　浅見　淵　四〇五
年譜　四三三

外村　繁集

夢幻泡影

繁

鵜の物語

一

大都会の停車場にはいつもその沿線の村々や、小さな町々から吹き送られてきたような希望に充ちた顔々が、不意に大都会のまっただ中に投げだされて嵐のような渦を捲起しているものだ。また反対に都会の哀愁に彩られたさながら魂の抜けてしまったような顔々が、それらの村や町へ送り還されんがために、静かに揺ぎ、あるいは屯しているものだ。そうしてそれは人々の心に懐郷的な感傷と、頽廃的な絶望とをかき起こさせるものなのだ。が、そうしたうら悲しい遽しさにとり憑かれている旅人たちとは一見して異る人々が、たとえば上野駅で、夜の十時三十分青森行急行列車の発車前などになると駿馬のようにしゃんしゃんと乗りこんでくるのを見ることができる。彼らは皆お洒落で敏捷で快活である。真白のカラーか、あるいはおろしたての白足袋で、手には決ってその時々流行の鞄を提げている。彼らは停車場に乗りこむやまったく馴れきった手つきで所要の事務を処理して行く。たとえばまず切符を、それも上野より青森赤羽池袋経由大阪行とか、何々線乗換何々駅間往復とかいうたって複雑な切符を、二言三言駅員と談笑している間に、手品師のような素早さで手にしてしまうのだ。切符を手にすると彼らはさっさと売店に急ぎ、四五枚の夕刊と、好み好みの煙草とを買い求める。彼らはこの列車の食堂には敷島きり売っていないことを知っていたし、バットはあの色白のっぽのボーイがしこたま仕込んでおくのだが、それを求めるとなると、どうしてもチップなしではすまされないことも知っていた。あののっぽはけっして七銭のバット代は受取らないが、チップとなるとまた別である。だから彼らは、たとえ馴染の女給と半時間の別れを惜んでいたがために発車前ぎりぎりに駆けつけたとしても、切符を買うとすぐあののっぽの姿を思いだし、売店へ走らねばならないのだった。彼ら、強烈なニコチン中毒者はこの大切な仕入れを終ると、悠然と入口の方へ引返して行く。するとそこへ機械のような正確さで、今自転車で乗り着けたばかりの小僧が縞の風呂敷か、あるいはズックの大きな見本包を担いでやってくるのだ。

彼らはそれをまた不思議なほど素速く見つけだし、さっと合図をすると、小僧はまるでラグビー選手のような勢で手荷物係の所へ走りこむのだ。そうしてそこでも彼らは落着き払って、それがためまた巧みな速さで、商品見本にして出してしまう。この洒落者にはおよそ不似合な大荷物には手も触れないで。それが終ると、小僧たちはちょうど桟橋を離れて行く小船のように無表情にさっさと帰って行ってしまう。するとそこで初めて彼らは煙草に火をつけ、静かにあたりの情景を見廻すのだった。が、それまでの行動はきわめて敏捷で、正確で、そうして石のように無表情に行われた。そこには初めて見る大都会の繁華と雑閙と冷酷さに震えている小娘の心があろうと、生計の道を失ってまたあの疲れきった故郷へ帰って行かなければならない敗残者の心があろうと、あるいはまた酔払いや狂人がどんなおもしろいことをおっ初めていようと、また闇をつき裂いて急を告げるどんな恐しい警笛が鳴り響いていようと、彼らはそれを視もせず、聴きもせず、そうして感じもしなかった。彼らはちょうど競走馬のように重大な任務を帯びてい、またそれを十分果せるようによく調練されていた。彼らは各問屋の出張員である。日本橋あたりの呉服、洋反物、雑貨、薬品などの問屋から、あるいは浅草、神田あたりの玩具や既成品などの問屋から、東北、北海道、信越の各地へ派遣される出張員たちなのだ。

第一線に立つ彼ら出張員たちは、もちろん勝れた売手でなければならない。快活で、敏捷で、そうして第一満満たる闘志がなければならない。彼らの血管の中には、昔天秤棒一つ担いで野を越え山を越えて売り歩いた祖先の血が今もなお脈々と流れているのだ。

「山一さん。もしこの峠が一つごせんけりゃ、信州廻りもわるごせんがのう」と言った同行の同業者に、「なんの。わしゃまたこんな峠がもう一つ二つもありゃええと思っとりますじゃ。そしたらあんさんもようお出でやごせんから、わしゃ一人で思う存分ぼろ口行けますからのう」と答えた、木綿問屋山一の先々代の物語は今もなお彼らのつねに聴かされる教訓の一つだった。今はその峠にも汽車が通じていい、一瞬のうちに過ぎ去ることができるのだが、それがためにこそ彼らはなおいっそう世智辛い闘争を行わなければならなかった。「カワセタカワタヤスメンシ××エン」そんな下げ相場の電報を受け取ろうものなら、彼らは一刻も早く、まだ他店の相場が知られていない間に先占の利を占めんものと、あらゆる交通機関を利用して飛蝗のように飛び廻らなければならなかった。だから彼らは今何時何分には何号列車はどこを

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

走っているかということも、某市から某町へ行く乗合自動車の終発は何時何分だということも、何屋の親爺は朝寝坊だから何時にならなければ店に出ないということも、皆手に取るように知っているのだった。

彼らはまた示威と宣伝と儀礼とを兼ねたよき外交官でなければならなかった。だから、彼らは皆お洒落で、派手で、剽軽者揃いであった。宿は一等旅館で、金は湯水のようにばっぱと使うように見せていなければならない。がそれでいて、彼らの給料は二十円ぐらいから高くて百円がせいぜいだった。だから店に対しては忠実な、得意先に向かっては巧妙な集金人でもなければならない彼らと、店との間にはあらゆる智慧比べがいつも繰返されていた。

貴店帳尻上記のごとく相なりおり候や御手数ながら御返事煩わしたく——こうした手紙が時々抜打ちに八方に飛ぶ。集金証、指定旅館宿泊証、翌日行動予定報告書等等、彼ら出張員はまるで金縛りに縛られたようにまったく手も足も出ないはずであるのに、彼らは平気でのことことカッフェへも行けば、土地の芸者と浮名を流すものさえもずいぶんとあるのだ。昨晩の酒代を昼飯を抜いたり、宿屋の番頭や女中のチップをちょろまかして埋めている間はほんの駆出しで、大店の帳場を酒と女で鰌にしたり、支払の悪い店の大将の顔を舐めるくらいは朝飯前である。だから事務や支配人は時々重い尻を上げて、視察に名を藉り不得手な素人探偵になりすまさなければならなかった。赤字に次ぐ赤字の今日このごろ、社長や店主の必死の眼はますます鋭く彼らの上に投げられている。が一方彼らの敏捷を誇る腕は、無賞与や出張手当の減額などに磨かれて、手品師のように鮮かさを増して行くのだった。

が彼らは行かねばならない。万を数える彼ら出張員たちは雨が降っても風が吹いても、全国の津々浦々を、樺太や満鮮の果までも、野を越え山を越え毎日毎日渡り歩いているのだ。一年じゅう、町から町へ、一日として落着いたこともない彼らの心は故郷を忘れ、家庭を忘れ、やがて自分をも忘れはてているのだった。名もない田舎の停車場で、汽車を待つ間、ふと秋の斜陽に浮んだ自分の影法師をいかに多くの彼らがしみじみと見入ったことか。が、それは一瞬の夢にすぎないのだ。朝はどこかの若大将の前で軽妙な軽口をたたきながら、御機嫌とりどり算盤の玉を弾き上げていたかと思うと、夕方には金払いの悪い親爺の前で腕さえ捲くらんばかりの勢で詰寄りながら、なんとかしてお嬶の臍繰金でも取り上げてやろうと企んでいる彼らだった。

しかし最近こうした酒と女と算盤の他は、煙草と冗談でふふんとばかり世の中を嘲笑っていた彼らの中でも、自分たち出張員のことを「鵜」と呼ぶようになった。そうして「鵜の会」という集りさえできるようになった。「鵜」という名前の名づけ親は、東京のあの有名な鳩メリヤス株式会社の東北出張員岩田富蔵君であり、「鵜の会」の設立者は、洋反物商株式会社梶万商店東京店の東北出張員杉野市郎君であった。が、私がここで物語ろうとするのは、「鵜の会」とはどんな会で、なぜそうした結合が彼らの間に起ったかというのではなく、ただ杉野君を主人公とする一篇の鵜の——すなわち出張員の物語である。

十一月の東北はもう冬だ。一団の黒い雲が北の空を雲脚速く流れていた。樹々の梢は雪を呼んで戦き、枯草は白い穂を波頭のように揺りながらざわざわと立騒いでいた。初めての出張に出た杉野市郎君はいつも汽車の窓に顔を寄せ、じっと外の風光を眺めていた。関西地方と違って、何の変化もないただ寞々とした東北の冬の野には何か身に迫る荒寥さがあった。杉野君はごとごと、ごとごとと汽車に揺られながら、どこか遠い国へ一人ぽっちに置き去られに行くような心細さを感じるのだった。

筑紫のきわみ、陸奥のおく……

ふと、螢の光の一節を思いだし、自分が今こんな所でこんなことを思っていようとは、田舎の母も兄も妹もゆめにも知らないであろう。人の運命というものはどこでどう変るものか。若い杉野君は初めて嶮しい人生の行路を仰ぎ見るような激しい感情に襲われた。が、こうしたいろいろの感傷が、それは初めて旅に出たまだ二十歳にもならぬ杉野君にはむりからぬことであったが、それが今度の出張の非常な不成績の主な原因なのであった。

杉野君は仙台の林呉服店の仕入方の前で、他店の出張員たちの白い眼を感じながら、緊張して初めて見本の風呂敷包を開いたのであった。

「この辺いけると思いますが」

「これがかい、梶万。あほ言うない。こんな二番手や三番手の古見本持ってきやがって。仙台や思てあんまり舐めたことしやがると承知せんで」

関西出のこの仕入方は真向からその有名な毒舌を振るった。軽く受け流せばいいのだ。そう思いながら、なぜか若い杉野君の口は硬く強張って、かえって思わぬことを言ってしまった。

「そ、そんなことありません。まったく新柄でして」

「シンガラ。ほれ何言うてんね。人をあほにすな。ほん

まに。おい君ら、これが梶万さんの新柄やて。後学のために拝んどきなはれ」と言うと、その仕入方は荒々しくモスの見本を他店の出張員の前に投げだした。杉野君の眼に金魚の柄が赤かった。

それ以来盛岡でも八戸でも、どこでも話にならぬ不成績であった。八戸の角甚呉服店では鳩メリヤスの岩田という、まるで寄席の万歳にでも出てきそうな、見るから歯の浮くような身なりをした、それでいていたって気心のよさそうな剽軽者の口添えでちょっと纏った商談ができたものの、値段は元値に近かった。

「大抜擢やでな。ひとつうんと気張ってくれんとあかんで。ほら齢が齢やで難しかろ。けどやそこが一心や。できんことはないと思うて一心にやれば何でもやれる。齢が齢やでできんこともできる。断じて成績を堕さんように気張ってもらいたいのや」

支配人の山本さんから、費込みをして店を出された藤田の謙どんの後をやれと言われた時の驚きと喜び、新調の洋服のできてきた時の朋輩たちの羨ましそうな眼、上野駅を立つ時の胸の慄えるような意気込み——それやこれやを思うにつけ、すっかり山本さんの期待を裏切った不甲斐ない自分の姿をしみじみと感じながら、幾日、暮れはてた東北の町々を重い荷物を抱えてとぼとぼ宿屋へ辿り着いたことか。そうしてそこでもまた情ない報告を毎夜毎夜書かなければならなかった。

青森でも、ことにここには小さいながら二三の問屋もあるので相当の大口註文が取れるはずだったのにやはりだめであった。弾く算盤にどうしたものか心が乗らなかった。が、杉野君はあの林檎売りの並んだ青森の街を、ようやく本調子になってきた東北の寒さを背に感じながら歩いていると、何かほっとした幸福感が湧いてくるのだった。

「もう明日一日だ」と杉野君はほっとした喜びを、そう呟いた。

二

田舎である。そのままの風景である。武右衛門水車のまだ水上のあの藪の下で、手網を提げて雑魚を捕っているのだった。碧く澱んだ水の中には川楊の根が白かった。地層のある坡の上から、竹が重なり合い叢り合って、川を覆うように垂下っていた。竹の葉はじっと昼の陽に翡翠の色に静まっているかと思うと、やがてきらきらと輝いて金色の光が雨のように水面に降り注いだ。ちょうど川の曲り角なので、その反対の側には、白い小砂の上をだんだんに浅くなった流れがぴちぴちと跳ねていた。

遠く水車の音が時々人の心を意識の外に誘いこむようであった。と、不意に息の詰まるようなものを見た。幾百匹とも知れぬみごとな金魚が真紅の鱗を花のように輝かせながら、あのもの静かな姿でゆらゆらと游いでいるのだった。豪華な友禅の模様だった。思わず戦く手で手網を取った……

杉野君ははっと眼を覚ました。反射的に枕元の腕時計を見るとまだ六時前であった。あたりはまだ暗く、階下でも何の物音もしなかった。ほっとした杉野君の頭はまたうつうつと夢の跡を辿っていた。

杉野君は父を知らない。母一人の手で兄妹三人が育てられてきたのであった。だから彼の家はもとより非常に貧しかった。子供の時分、彼は雑魚取りではけっして友だち仲間に負けなかった。池にはいつも鯉や鮒や鮠などが游いでいた。が、金魚だけはどうしても手にすることができなかった。あの紅い艶かな、まるで玩具のような美しい金魚。子供心によほどそれが欲しかったのであろう。杉野君は東京へ丁稚に来てからも、たくさんの金魚が游いでいたり、それを夢中で掬い上げている夢をよく見ることがあった。

また暢気な夢を見ていた——と彼は思った。すると昨日来のことが、こうしてここに寝ていることまでが、何か夢のように思われてくるのであった。

昨日は朝から非常な寒気だった。本線を捨て、玩具のような軽便鉄道に乗ったころから、杉野君はただならぬ雲の気配を感じていた。その辺は一目、ただ一面の林檎畑で、汽車の窓からでも手に取れるばかりの所に、みごとな林檎が花のように赤く熟していた。さらさらと不意に灰のようなものが窓に当った。杉野君が思わず眼を上げると、いつの間にかあたりは一面灰色の雲に覆いつくされ、空から雪というより灰のような粉が、おりからの木枯に吹き捲くられ、躍るがごとく跳ねるがごとく舞散りながら降りてくるところだった。彼はこの壮絶な風景に思わず心を奪われ、じっと眺め入っていた。汽車はみるみる白一色に塗りつぶされて行く曠野の中を、泣くような汽笛を鳴らしながらがたがたと走り続けた。

G町に着いたころはもう一尺先も見えぬ吹雪であった。鈴をつけた馬、がたがたの箱馬車、雪止めの新しい蓆、そんなものが雑然と並んでいる駅前で、杉野君は呆然と立ちつくしてしまった。土地の人々は自然に柔順な人たちのみの持つ敬虔さで、ただ黙々と動いていた。

杉野君はまるで吹雪に吹きこまれた人間のように、近江呉服店へ転がりこんだ。店には誰もいず、黒々と古風にくすんだ店構がしんと静まり返っていた。囲炉裡に火

が赤々と燃え、鉄瓶からは白い湯気が暖そうに立っていた。杉野君は雪を払いながら、何かほっと安堵した気持になって行った。ふと顔を上げると、奥の帳場に一人の少女が手に雑誌を持ったままこちらを向いて頬笑んでいた。笑靨が白い花のように美しかった。

「あの、東京の梶万でございますが」

杉野君ははっとしてお辞儀をした。少女も学校でするように丁寧に頭を下げると、そのままぱたぱた奥の方へ走って行った。裾の短い着物の下にすっくりと伸びた白い脚、そうしておさげに結んだ赤いりぼんが、蝶々のように奥へ飛んで行った後を、杉野君は夢のようにじっと見送っていた。

「ほうほう。それははあ」

そこへ主人がそう言いながら、煙草盆を提げて出てきた。

「ひどい雪ではあ。さあ寒い時は火の側が一番す」と、炉辺に坐りながら、煙管で煙草を吸うのだった。杉野君も挨拶をして坐った。

「こうぞ、こうぞ」

主人は突然大声で小僧を呼び、

「座蒲団こさ持ってこ」と命じるのだった。杉野君は囲炉裡に心持ち手をさしだしながら、瞼のなぜか熱くなるのを覚えた。

「ここへは初めてだべ。この雪こはあ驚きなすっただべのう」

「何もかも初めてでして」

杉野君はまるで訴えるように、種々の思いを籠めてそう言った。

「ほうほう。よく来なすった」

そこへ先刻の少女がにこにこ笑いながら、お茶を持ってきた。

「これが娘っこではあ、道ちゃ、お辞儀はあしなすったべのう」

少女はくくっと笑ったまま、またぱたぱたと奥へ走って行ってしまった。白い額、黒々としたつぶらな瞳、そうしてまた白い花のような笑靨だった。杉野君は自分までが何かにこにこと今は心楽しかった。

「ひとつうんとやってください」と元気よく言い、例のようにまずモスの見本を開いた。

「ほう。この朱ははあよくできたっす」

主人は見本を手にすると、いきなりさも感じ入ったように呟いた。杉野君ははっとした。そうだった。今まで何をしていたのだ！　杉野君は初めてそう思った。

梶万商店の冬物第三回新柄発表会の当日は店じゅう浮

き浮きしていた。大将が大阪から来ているのに、まるで破れるような笑声や、呶鳴り声でいっぱいだった。ことにモスの評判はたいしたものであった。日ごろ鬼のように言われているあるデパートの仕入主任まで、

「朱だよ。要するに朱の勝利か」と言って、大声で笑ったではなかったか。

——商品は我が子のごとく思え。出来がよかったといって可愛がり、悪かったといって可愛がれ、人前でことさらに誇らず、卑下せず、抱きしめるがごとき心にて愛せよ——

杉野君はこうした商人の格言を今まですっかり忘れていた。否、彼は今まで商人であることさえも、しばしば忘れていたのではあったが。

モスは着尺だけで百反も買ってくれた。綿モスは三百反近くもできた。不二絹、その他無地物も相当の手合せができた。金も限りまで全部くれた。そればかりではない。自家の畑で獲れた林檎だ。さあいかほどでも喰べろ。これは雪の下というのだ。これは酸味が強い。これは満紅だ。さあさあ、とまるで遠くから帰ってきた吾が子のように饗してくれるのだった。

「ありがとう。この御恩は一生忘れません」

杉野君は心の中で両手をついて、堅く心に誓うのであった。

丸甲呉服店も寺島商店も上々の首尾だった。杉野君は雪の止んだGの街を見本包を肩にして、身も心も軽々と歩いていた。灰色の空に一連の青空が水のように淡く流れていた。数羽の鳥が翻翻と飛交っていた。風に向かって立上ったような姿で撥々と羽を動かしていたかと思うと、くるりと身を翻し、矢のようにどこかへ流れて行くのだった。ぽっと街に灯が入った。杉野君は不意に白い花のような少女の笑顔を思いだした。

店には外売から帰った番頭や小僧たちが列んでいた。

「先刻はどうもいろいろとありがとうございました。おかげさまですっかり用ずみになりましたので、明日の急行で帰らしていただきますから」

杉野君は近江呉服店へ挨拶だけのつもりで立寄った。がそのままたって薦められるままに夕食の御馳走になり、いつの間にかつい時間を過してしまい、宿などむだだから、と言われとうとう思いも寄らぬ所で一夜の夢を結んだのであった……

襖がちょっと開いた。昨夜の白い笑靨が、今朝も花のように笑っていた。

「お早うございます」

みっちゃんはそう言うと、そのままばたばたと梯子段

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co